
ブラザーハウスの追憶

梶野幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラザーハウスの追憶

【Nコード】

N9096S

【作者名】

梶野幸

【あらすじ】

身よりのない僕は、寄宿舎の閉まる夏期休暇の間に、とある写真家の家に下宿することになる
当代随一と言われた腕前の彼にはしかし、不気味な噂があった
「あいつは死に憑かれておる」

大人になり損ねた大きな少年のような彼は、初対面とは思えない馴れ馴れしさで「僕」を迎える
何年も一緒に過ごした日とに接するような親しさ

僕はとまどい、曖昧にうなづくことしかできなかった

しかし、彼と生活を共にするにつれ、誰かと暮らす安心、穏やかさを僕は知る

写真家さんについて

もっと何かを知りたいと重いながら、しかし、このやさしい日々を壊すのが恐くて

何も言い出せない

写真家さんの周りを影のようにちらつく「あの人」とはいつたい誰なのか

やさしい日々混じる、小さな寂寥とわびしさ

寂しさに埋もれるように生きてきた僕と、

それを遠ざけるがゆえにずっと一人だった写真家さんとの、不器用な共同生活が始まる

POLISH*UPというブログで掲載しております

また、PIXIVでも閲覧できるようにしております

写真家さんは馴れ馴れしすぎる

(一)

右から左へ流れる景色を見ながら、戻らない過去を考えていた。幼い頃のことだ。思い出そうとしていたのではない、ただぼんやりと、昔のことを考えていた。それは大して印象に残っていない本の筋書きを思うような回想で、とりとめもなく散らかる記憶を掻き集めるまでもなく眺めているようなものだった。

汽車の窓からは見渡す限りの麦畑が見える。すずかけの木の林が見える。抜けるような空の青と、網膜を焼くまっしろな光に、胸の底がふと軽くなる。

炭坑と精錬所の街で生まれ育った僕は、今までこの景色を写真の中でしか見たことがなかった。炭坑の街に親戚はたくさんいたが、生みの親を早くに亡くした僕が安住できる土地は無かった。寄宿舎のある学校への入学が決まってからは、親戚には一度も会っていない。

夏期休暇を過ごすための家を探していると、下宿受け入れの広告の中で、小さな写真が目についた。すずかけの木からこぼれる木漏れ日の写真だった。手に取ると手放せない魅力があつて、自分でも不思議なほど、その写真に心惹かれていた。おそらく視線のやさしさが違うのだ。街に出回る雑誌の写真とは違い、その写真には熱があつた。眩しそつに目を細める、写真の主の姿が目浮かぶようだった。

ふと気がつくと、僕は下宿希望の手紙に切手を貼っていた。部屋主は著名な写真家らしいが、若いのか老けているのか、想像もつかない。

すずかけの木と麦畑の広がる景色は、彼とやりとりした手紙に入っていた写真で見た。彼は他にも、その村から見える空の様子や、

街で人々が笑いさざめく姿を何枚か同封して、手紙を交換するたびに送ってくれた。

乗客は、気づけば僕一人になっていた。汽車は無人の駅に滑り込む。ホームに下りると、正午を目前とした日差しが網膜の裏をちかちか刺した。

改札をくぐって、僕は足を止める。息を吸うと、ほの甘い太陽と小麦の匂いが胸を満たした。

手紙に記された地図を辿って歩いてゆくと、小さな村の東に出た。活気溢れる市場を抜けて、糸杉の茂る森を目指す。市場に集う人々は皆、日に焼けて健やかな足をしていた。活気溢れる目をしていた。この世に憂いなど無いような、賑やかで明るい表情の人々の間を、僕は縫うようにすり抜けてゆく。肉屋の厨房から流れ出る香ばしい鶏肉の匂いに、昼下がりのなにもまだ昼食を摂っていないことに気がついた。恨めしげに鳴る腹を押さえ、僕は地図に記された森に向かう。

糸杉の森は静かだった。

市場の喧噪が急に遠ざかり、別の国に来たようだった。鬱蒼と茂る木々に覆われ、地面に光がほとんど届いていない。ひいやりと湿った風が腕を撫で、木漏れ日が僕の顔を横切つてゆく。部屋主がやさしい視線で切り取った光だ。下宿を募る時に添えずにはおられなかった、眩しくて清潔な光だった。

ふいに大きな音がした。

何かが軋み、壊れる音だ。叩き付けられ砕ける音だった。遠くから響く音に一瞬足がすくみ、それから、何が起きたのかと早足になる。十歩も歩かないうちに、鬱蒼とした森は突如として開いて、日だまりの草原に出た。

そこには、地図に記してある通り、黒い石造りの小さな家があった。煙突と飾り窓の美しい、隠れ家のような家だった。そして、その前には広々と風の抜ける広場がある。そこには、豪快に木製の机を叩き割る男の姿があった。

ためらいのない、胸のすくような手つきで、彼はかつて机だった木材を粉々にしてゆく。何も身に着けていない上半身に、光のような汗がしたたり、木漏れ日のつくる不規則な影が、引き締まりつややかに張った背中を撫でた。粉々になった木っ端が彼のジーンズに飛び散り、それを払おうともしないで彼は、思い切りよく木材を粉砕してゆく。そのあまりのすがすがしさに、僕はしばし呆然と彼を見つめていた。

彼はやがて満足したように汗をぬぐい、息をつく。視線を上げたところでちよつと僕の姿を認め、彼はざっくりと片手を上げた。

「いらつしやい」

独特に掠れた、麦畑に注ぐ眩しい日差しによく似合う声だった。そばかすと薄い唇、細い眉に気さくな笑み、やんちゃな少年がうつすら影を帯びたまま大人になったような、不思議な風貌だった。カラスの濡れ羽のような黒髪の下から、深い鳶色の瞳がこちらを見返している。

これといった特徴もない、しかし、一度見たら忘れられない印象的な顔立ちだった。強いて言うならまなざしが違うのだ。僕の表面や外見ではなくて、僕を突き抜けた遙か遠くの景色を見渡すような視線だった。心の底まで見透かされているような気がしたし、僕は僕なぞ見てはいないと言う気もした。

「はじめまして、お世話になります」

「堅いこと言うなよ、好きでやってんだから」

彼は無造作に手についた木っ端をジーンズで拭い、大きな手をこちらに差し出した。

「昼飯にしよう」

彼は僕の手から鞆を取り上げ、自分の肩に気軽に担いだ。粉碎した木っ端をそのままに、彼は僕に背中を見せて、ずんずん石造りの家に向かって歩いていった。慌てて後を追った時、僕は初めて、彼の背にうつすらと広がる傷跡を認めた。日に焼けているせいでほとんど目立たないが、右肩から左の腰にかけて伸びる、大きな火傷の

跡だった。

彼の噂は、炭坑の街で耳にしている。

世界に名の知れた写真家の息子で、何年か前に親と家とを火事で失った。本名を知る人は少なく、どんな人からも写真家さん、と呼ばれている。

まだあどけない頬の線を残していた彼は、燃え上がる家に、両親の葬式で泣き崩れる親戚に、そつとカメラを向けたらしい。涙一つこぼさず、ただただシャッターを押していたという。そしてその写真によつて、彼は世界的な賞を総舐めにした。

今は森の奥深くにこもり、街の様子や森の景色を撮っては雑誌に載せ、収入を得ている。実際はそんなことをしなくても食べていけるほどの財産があると聞いた。

「あそこでは人が死んだんだよ」

彼のことを教えてくれた老婆は言った。炭坑の街の写真館の、ひつつめ髪が印象的な老婆だった。彼女は早熟の天才のことを語る時、憧れを込めるように熱っぽく、そして時折、ひどく押し込めたような口調になった。旅行許可証をもらうための身分証明写真を撮ってもらいに行った時だ。彼女の口調には、優秀な同業者へのありがちな悪意ではない、眩しいものを目にした時の戸惑いや、眩しいものに焦がれる、戸惑いを突き破る熱があった。

「理由は誰も知らない。あやつと共に暮らしていた若造が、まさにあの森で命を落とした。それでもあやつは、今もあそこで暮らしている」

光を調節し、目をしばたかせながら老婆は言った。

「目を剥くような好条件での売却持ちかけもあった。あやつにもつと良い邸宅を用意して、後ろ盾になろうとする企業もごまんとあった。それでもあやつは、頑なにあの家から離れようとしなかった」

シャッターが下り、フラッシュが光る。網膜の裏に濃い残像が残

って、それは何やら大切な人を傷つけてしまった時の後悔のように、なかなか消えずに目の端にあった。

「あやつは死に憑かれておる」

僕は婆さんの話を聞くのがひどくおっくうだった。会ったことのない人の噂話など聞いても意味が無い気がしたし、それを聞いて、夏の間の生活の何かが変わるとはとうてい思えなかった。僕はその時何かを言った気がするし、何も言わなかったような気もする。

「お前が下宿するのは、そういう家だ」

試すわけでも焚きつけるわけでもない、ごく静かな声で彼女は言った。そしてそれ以降、彼女から彼の話の聞くことはなかった。

彼は僕の鞆を無造作に玄関に放り投げ、まっすぐ家の奥に向かった。僕は彼が放り投げた鞆の着地場所の横にそつとポストンを置いて、彼の後をついてゆく。

通されたのは、白い壁と大きな窓の印象的なリビングだった。彼はキッチンで鍋の中身を温め直しはじめ、僕に座っているようあごをしゃくつた。

「何か僕も手伝います」

「勝手にわからないだろう」

ごく親しい者に向けるような、気取らない口調に閉口する。本当に自分はこの人と初対面なのだろうか。思わず自分の過去を振り向いて探さずにはおれないほど、彼の振るまいには遠慮とか、躊躇いというものが感じられない。

振り返った過去は曖昧で霧の中に漂うように、散漫に散らばっては形を成しかけて、また同じように消えてゆく。

「写真家さん、なんですすよね」

野菜に熱の通る音、黒胡椒の香ばしい匂い、コンロにこぼれた何かが小さく爆ぜる音。そんなものの向こうから彼は視線を上げる。不思議そうにこちらを見返している。

「なんていうか、体格が良くて格好良いから、つい」

「写真なんて似合わないだろう」

口の端を器用に片方だけ吊り上げて、彼は笑う。

「写真館に来た人に、『それで、写真屋さんは』なんて言われるのもしよつちゆうさ」

「写真館があるんですか」

「時々人が来る」

彼はあつという間に料理を用意して、たくさん皿を並べてくれた。色鮮やかな野菜のサラダ、うっとりコンソメの匂いが立ち上る澄みきったスープ、パンの小麦の匂いがやさしい。いただきます、と手を合わせると、彼は眩しいものを見るように笑った。

「あの机はいらなくなつた机ですか」

「納屋から出てきたんだ。あんなに大きな机、どうしようもないから」

澄み切つたスープは薫り高く、豊饒な風味と熱を残して消えてゆく。なんとなく理不尽な思いを伝えきれず、僕はスープの表面に映る自分を見つめていた。人に譲るだとか、木材だけ再利用するだとかの思いつきのない、いらぬものは壊して土に還す思い切りの良さに、喉に小骨の掛かつたような違和感がある。生かすことも残すことも考えない、跡形もなく消してしまうことにためらいのない潔さは、自分には何年かかつても手に入られそうにないものだった。遠くて手が届かない、そこにあるのかどうかもわからない。

「あとで、写真撮つてやんなきゃな」

ふと、彼はこちらを見て呟いた。窓際に置いた、古びた旧式のカメラを見つめて彼は頷く。結構です、と言い掛けて、僕は言葉を飲み込んだ。

「気にしないで、らくにすれば良いから」

彼はそう言うと、お腹を空かせた子どものようにサラダをかきこんだ。二十歳を過ぎた外見とはひどくアンバランスな、あどけない動作だった。初対面の他人と対峙しているとは思えぬその姿を見て

いると、自分が何を言いたかったのか、わからなくなってきたしま
う。

僕はスープの最後をすすって言った。

「お仕事のルーティンとか、ありますか。音を立てない方が良い時
間とか」

「遠慮も気兼ねもいらない」

やさしい、こだわりのない物言いだった。彼は行儀悪く食卓に肘
をついて、指をくるくる回して見せる。

「飯はできるだけ、顔をつきあわせて食べよう。それ以外は好きに
してくれて良い」

僕は彼の言葉を、まるで異国の言葉を聞くように聞いていた。そ
れは見知らぬ土地にたった一人で突き出されたような、迷子になっ
た子どものような戸惑いにも似ていた。意思の疎通を図ろうと目を
こらしても、ただ親しげな双眸がこちらを見返している。

親のいない僕はずっと、他人の家で暮らしてきた。首を縮め、物
音を立てないように生きてきたのだ。遠慮も気兼ねも染みついてい
た。

空になったスープ皿を取り上げ、彼はさらにスープを注いでくれ
る。その動作の自然さがこそばゆく、どうして良いのかまるでわか
らなかった。

これからここで、僕はどうやって暮らしてゆけば良いんだろう。

ことごと手元に置かれたスープ皿を見て、その湯気に顔をひたして、
僕はぼんやり考えた。

遠慮も気兼ねもしてはならないとすれば、彼の意に沿うにはいっ
たい、どうやって。

「おかわりも我慢しないこと」

彼が口の端を吊り上げ笑う。吸い込まれるように、吊られるよう
に、僕も小さく笑った。

その夜、僕は割り当てられた二階の東向きの部屋で、ぼんやり空を見つめていた。日当たりと風通しの良い部屋だった。綺麗に埃の除かれた机と本棚、それから小さなベッドがあつて、薄いカーテンが月影に透けていた。飾り気もしゃれつ気も一切無い、ひどく居心地の良い部屋だった。あつけらかなと空っぽで、何も考えずにぼんやりとここに座ることを許してくれる部屋、形をとどめず流れる思考を貯めもせず押し流しもせずに、ただただあるがままにさせてくれる部屋だった。

心は冬の湖のように凪いでいる。これほど安らかな気持ちでいると、不思議と気持ちは過去のことへと向かった。

たった一人で歩いた夜の路地裏だとか、静かな微笑をたたえた学校図書館の司書さんだとか、いたたまれなくて仕方がなかった、幼い頃の食事の風景だとか。

僕は親の顔を知らない。かつてあつたと言う事故で亡くしたとかで、幼い頃から親戚の家をたらい回しにされていた。やっと決まった寄宿舎つきの専門学校に入るまでは、母の姉の夫だった人の家にいたが、休暇中そこに戻る気はさらさらなかった。

彼は自らの妻が病死して以来二年間、別に一緒に暮らしたくもない、血のつながりの無い甥と生活をともししてくれた。

彼は亡き妻の妹の夫を好いてはいなかった。商売敵で、姻族になるまでは何度も財産を少なからず巻き上げられたことがあると言う。母ではなく父に似て来た僕の顔をあからさまに嫌う時もあった。酔えば愚痴は際限なく続いた。

事業にうまくいかない時、甥の顔を見ると商売敵を思い出して彼はますます酔った。

そんなとき、彼は血の繋がらない甥と顔を合わせることが嫌った。声に出さなくてもわかっていた。ほんの小さな目つきが違うのだ。いつもと変わらぬ物言いの底に、小さな棘が含まれているのを敏感に感じ取っていた。

そんなときはいつも、それを察してこっそり夜遅くまで街を歩き

回った。部屋にこもってシーツにもぐりこんだまま、じっとしている日もあった。

それでも全くかまわなかった。いつ放り出しても良い甥を曲がりなりにも家に置いてくれる、彼の親切には感謝していたのだ。

住所を転々としていたせいで友達はない、一度面倒を見てくれた親戚は二度と僕とは目を合わせたがらない、僕には伯父のもとしか居場所が無かった。

伯父に再婚の話が舞い込んだのは一年前のことだ。血の繋がらない、養子縁組もしていない少年の存在が再婚相手に隠しきれなくなるのは時間の問題だった。彼は再婚相手を喫茶店に呼び出し、自分からそのことを告げた。臨時休校で下校の早まった僕が、偶然回りを道をしてその喫茶店の前を通ってしまったのは、もはや不幸以外の何者でもなかったのだらう。伯父は困ったような、焦りのような、小さな苦笑いのような複雑な表情で、早口に、しかしはつきりとまくしたてていた。

「どうせあと半年で、奴は寄宿舎のある学校へ行く。そうすれば縁も関係も切れるから。それっきりもう、私たちと会うことはないのだから」

それでも、物語や小説でよく出てくる寂しさとかいうやつ、涙と、それを乾かした太陽の匂いのシーツに顔を埋めているときにふいにやってくる、やるせなくうねり胸を締め付けるような気持ちをそう呼ぶのであれば、それは案外大したことではなかった。

黙って、頭を抱えてじっとしていれば、あれはやがて通り過ぎてゆく。秋の嵐みたいなものだ。心の中の色々なものをかき乱して、もう二度と立ち上がれないんじゃないかと思うほど打ちのめして、それでもいつかは過ぎてゆくのだ。

そうやって今まで生きてきた。おおむね満足のできる日々だった。彼の用意してくれたシーツに顔を埋める。ここのシーツは小麦の匂いだった。とろりと甘い小麦の匂いと、それを育んだ大地の匂いがした。

写真家は自らの部屋で、カーテンが月の光に透けるのをぼんやりと見つめていた。墨を流したような夜空に、針でついたような星がまたたく。葉擦れの音が耳に涼しい。

一週間ほど残った日記帳を彼は本棚に仕舞い、少し迷って、新しい日記帳を引き出した。ルーティンが無いというのは必ずしも真実ではなかった。いつから始めたか思い出せないくらいの長い間、毎晩毎晩、代わり映えのない内容を何かしら書き付けている。もう日記帳は何冊目になっただろう、これをしないと眠れなかった。

隣の部屋からは、物音ひとつ聞こえない。慣れない部屋に目が冴えて、眠れずに天井を見つめているのだろうか。息さえ潜めてタオルケットにくるまり、ただただ夜明けを待つのだろうか。

かつてあの部屋に住んでいた人は、いつも規則正しい寝息を立て眠っていた。寝言がうるさくて眠れない日もあった。隣の部屋から穏やかな寝顔が聞こえて初めて、写真家はいつもまどろみはじめるのだった。

真新しい、きめの細かい日記帳のページを指で撫でる。新しい日記帳を開く時はいつも、懐かしくて真新しく、ときめきともせつなさともつかぬ奇妙な感覚が押し寄せてくる。

これから書き付けられるはずの日々が、さびしくこちらを呼んでいる。

七月二十五日、晴れ

朝から目立たないところの掃除 面倒だから良いかと思ったけれど念のため

下宿生が来るまでに終わらせる 大きな机が出てきたので処分

下宿生は十七歳 それにしては華奢で青白い

繊細で遠慮がち 神経質か几帳面かはわからない そんなことどうでも良いけど

メシは黙々と食べる

朝 ホットサンド

昼 野菜のコンソメスープとかいろいろ

夜 ビールを空けようとしてやっぱり辞める

目の前に人がいるのに一人で酔うのは寂しい

ベジタリアンみたいな食事がつづく そろそろ肉が食いたい

「兄ちゃん！」

森の澄みきつた空気を裂いて、あどけない声が響いた。

飼い犬ラブを洗っていた写真家は、顔を上げ目を細めて、広場の向こうを見渡した。石造りの家の前の広場に、真夏の日差しが燦々と落ちる。やがて木々の間から、弟がまるぶようにこちらに駆けてくるのが見えた。

彼は弟に向けて、泡まみれの手を大きく振った。弟は大きなカゴいっぱいキイチゴを抱えていたが、やがてそれも足下に置いて、彼の腕の中に飛び込んでくる。

抱き留めた弟は、太陽の匂いとむせかえるような土の匂いがした。様々な草木や動物を育てた、豊饒で深い匂いだった。熱の塊のような熱い手が背中に回って、やさしく息が詰まる。

「やっぱ俺が穫りに行った方がいっぱい見つかる。兄ちゃん、でかいから足下の見落とすだろ」

「やつとおまえも食料調達に長けてきたか」

「俺の方が向いてるっつてば」

泡だらけのまま彼に捕まえられていたラブは、ふいにこそばゆく身をよじった。ホースの水を噴射してやると、じゃぶじゃぶと潔く泡が流れてゆく。石畳の玄関に水が溜まって、抜けるような青空を映した。

「兄ちゃん、俺も」

弟は白いシャツを脱ぎ捨て、冷たい玄関に飛び込んだ。ホースの水を向けてやるときゃっきゃと笑って、転げ回ってはまた笑った。

涼しげに水飛沫が飛び散る。水滴は真夏の日差しを受けて、様々な色に光った。

「俺にもやって、俺にも」

タンクトップを絞っている弟にホースを渡すと、突然水が止まった。驚いて辺りを見回すと、彼は自分がホースの途中を踏んでいるのを見つけた。思わず足を除けると、勢いよく水が噴き出した。

横顔にもろに水を食らって、弟はそれを指さしてけたけた笑う。

その声は日を増す毎にすっかりとした響きになり、少年らしい生意気さを身に付けてきていることを知る。それに気づくといつも、何だかすぐつたいような気がした。

弟の長いまつげの上には水滴が乗って、瞬きとともにきらきら光る。

「なあ、兄ちゃん、これ来年もやるっ」

「涼しくて良いな」

「ラブ洗う日はびしょ濡れ」

肉付きは悪いが年相応につやつやと輝く弟の頬を見て、ふと、これが失われたものであることを思い出す。幸せなこの瞬間が夢だと気づいて、せり上がる嗚咽を飲み下してうつむくのだ。燦々と降り注ぐ日差しに透ける弟の髪、こちらを見上げて笑う顔、そんなものを見ているとどうしようもなく愛おしくて、結局最後は腕を伸ばして抱きしめてしまう。華奢な肩を、壊れてしまいそうなくらいに強く。

兄ちゃん、苦しい、と抗議の声を聞くこともある。しかし、今夜はそれもよく聞こえぬまま、意識は真夏の日差しから失われていった。こうやって毎晩、大切なものを失ってゆくのだ。弟の失われたあの日から、痛みの鮮やかさはさして変わらず、それは突然やってくる。

写真家が呆然と目を覚ますと、夜明けの光が窓から見えた。薄紫色と、群青の間の白っぽく濁った空の色がばやけて滲むのを、彼はぼんやりと見つめていた。

写真家さんはまぶしすぎる

次の日、僕がリビングに下りてゆくと、彼はカメラを構えてしゃがみこんでいた。

「おはようございます」

「早いな」

机の上に、ジャムの瓶や林檎やテーブルクロスを並べ、彼はカーテンを動かしている。ファインダーを覗き込んで首をひねり、それからやがてシャッターを切った。無造作に散らかされたような光景を、彼が意識的に演出しているのが奇妙だった。なんでもない日常を切り取ったような写真が実は、構成され演出されて、デザインや芸術として整えられた後レンズに収められているということ、僕はそこで初めて知った。

「今から朝食作るから、待ってて」

「僕も手伝います」

「いい、いいから」

キッチンに入ろうとすると、彼はひどくうつるさそうに僕を追い払う。本当に、蚊でも追い払うような手つきで追いやられ、ついには背中を押されて僕はリビングの椅子に座った。椎の木だろうか、丁寧に模様の施された、骨董に近い年代物だ。

「食器とか、触られるの嫌なんだ。配置とか変わっちゃうから」

卵をフライパンに割り入れる、香ばしい音の向こうから彼は言う。二つの生卵を片手で割る器用さに驚いて、僕は思わず身を乗り出してキッチンを覗き込む。

まぶたの端で何か光ったような気がした。

「ああ、良い顔してる」

いつの間にか、魔法のように彼の手にカメラが握られていた。満足そうに頷いて、彼はまたフライパンをゆらしはじめる。僕はあっ

けにとられて彼を見た。

「何ですか」

「ああ、ごめん。気を悪くしたなら謝るよ」

全然悪びれない様子で、彼はさばさばと手を振った。口を開いて何か言おうとして、それなのに彼の素っ気なさに、何を言いたいのかわからなくなってくる。言葉にならない気持ちは冷たく、暗く残って、肺の底あたりにつっすら溜まった。

「写真を撮られるために取り澄ました顔よりも、一瞬、顔を横切る良い表情が好きなんだ」

彼は僕の向こうを見透かすように笑う。

「そういうのを残さないと、写真って意味が無いと思わない」

見透かされた僕はうつむき、足りない言葉を胸の中に探した。

自分の顔が残るのは嫌いだった。たいてい鏡を見る時、自分は暗く、押し込めたような顔をしていて、幼い頃から自分を見るのは嫌いだった。

「僕はあまり、良い表情をしませんよ」

「今の、良かったけどな」

僕は押し黙る。彼は小さな小瓶を手にし、首をひねって僕に尋ねた。

「シナモンは嫌いか」

「好きです」

「なら良かった」

甘い匂いがキッチンに満ちる。香ばしいトーストと、お洒落で甘いシナモンの匂いだ。誰かと親しげに話しながら、のんびり摂る食事にはまだ慣れない。逐一こちらを見て、こちらの言葉を聞いて吟味して、それから返ってくる返事に。こちらの好みを聞いてくれ、多少の配慮を利かせてつくってくれる食事に。

「市場に行かないか」

トーストを半分ほどかじった後、彼は唐突にそう言った。

「お邪魔じゃないですか」

「いや、行きたくなくや良いんだけど、そろそろ肉食いたいと思わない」

他人同士にありがちな、匂いのような、空気のような距離を、彼はまるで無視したように飛び越えてくる。そのたびに僕は一瞬、これは本当に自分に向けられた言葉なのかと訝ったり、本当は後ろに誰かいるんじゃないかと思ったりする。生まれた時から一緒に暮らす弟に言うような口調だ。恐らく一週間経っても慣れないだろう、彼にとっては他人と自分の区別さえ曖昧なのかもしれない。度を越えた近しさと、とうてい理解の及ばぬ馴れ馴れしさだ。

僕は曖昧に頷いた。

「一人で市場なんか歩いたって、寂しいだけだから」

何やら遠いものを見るような目で、彼は呟いた。

「欲しいものがあれば、それも買ってやるよ」

彼は僕のことを、きつと幼い弟か何かだと勘違いしている。

何か言おうとして、口を開きかけては閉じる。そんな僕を見た彼は口の端をゆがめて笑い、冗談だと思ふなよ、本気だから、と言って、さらに笑みを深くした。

初めて彼に会った日、彼が机を粉碎していた広場の隅に、ぼろぼろのジープが駐められていた。苔生したようなタイヤ、植物に浸食されたボディを見てみると、本当に動くのかと心配になってくる。森の一部のようなジープだ。

ふと、目の端に何かが引っかかったような気がして、僕はジープの脇を覗き込んだ。蔦や苔にひっそりと寄り添われ、静かに佇む石碑だった。墓だろうか、拙い字でひどく丁寧に文字が彫られている。

「誰かのお墓ですか」

「ああ、飼ってた犬のだよ」

ジープに鍵を差し込みながら、彼は静かに呟いた。

「黒いラブラドルで、ラブって呼んでた」

僕は曖昧に頷いた。そこに埋まっているのが犬だとは思えないほど、そう、まるで長年連れ添った相棒か何かを語るように、彼の声は深

くやさしい。僕の、恐らくどんな他人にも持ち得ぬ、深い執着と感慨だ。

「突然いなくなつて、必死で森の中を探したんだ。熊撃ちの人に間違つて撃たれたみたいで、まあ、それも昔の話だけれど」

彼に促され、僕は助手席に乗った。荒っぽい動作で彼はギアをたたき込む。今にも黒煙を上げて軋み爆発するのではないかと思われるような、ひどく不吉な音を立てて、森の一部のようなジープは動き出した。

振動のせいで、何か小さな写真が一枚、頭上のポケットからおちてくる。僕は思わずそれを手にとって見つめた。朝だろうか、綺麗な光のさしこむ白いソファに顔を埋める少年の寝顔で、その顔はただあどけなく、栗色の巻き毛の一本一本が光をはらんで透けていた。こんなに穏やかな顔で眠れたら幸せだろうと、羨ましい思いで僕はそれを見つめていた

「弟さんですか」

目を閉じているから顔立ちはよくわからない。しかし、肉親以外の前で、こんなに穏やかな顔で眠れるものだろうか。少年の姿を切り取った彼の手つきもまた優しく、他人に対する視線ではないようにも思われた。だからぼろっと呟いただけだった。

しかしその時、彼がひどく奇妙な顔をしたのを、僕は鮮やかに覚えていた。傷ついたような、自嘲のような、ひどく不確かな笑みと泣き顔が同居していた。木漏れ日のさしこむ、少年の写真を彼は僕の手から受け取り、それからまた、元のところへぶつきらぼうにさしこんだ。

「まあ、そんなものかな」

ことさら明るく彼は言つて、それからふいに押し黙った。森がさらに深みを増して、道はどんどん悪くなる。車内のゆれが強くなり、窓の外を流れる景色が加速した。車内はただただ静かだった。世界でたった二人、彼と取り残されたみたいだった。

市場は僕が初めて来た時と同じく、また、彼が送ってくれた写真の通り、活気に満ちて賑やかだった。鬱蒼と茂る森が朝夕の日差しを遮るあの家とは違い、低い太陽の光がまっすぐに網膜の裏を焼いた。

「久しぶり、俺だよ」

屋根のついた露天を覗き込み、気さくに彼は声を上げた。生の肉がぶら下げられた露天の奥からは、いかめしい体格の男が顔を出す。チヨコレート色に日焼けした肌と白髪の対比が眩しい。

彼に父親がいるとすれば、これくらいの子ではないかな。

「写真屋か。あんまり来ないから、もう肉は食わなくなったのかと思っただよ」

「肉が恋しくてたまらない。ここ三日ほど、動物性タンパク質を摂ってないんだ」

「男の一人暮らしだからって、不摂生はやめておけよ」

肉屋は彼の好みを知っているのか、さくさくと軽い動作で鶏肉や牛肉を見繕ってさばいてくれる。彼はそんな肉屋に、人差し指を立てて見せた。

「いつもの二倍で。今、下宿してる子がいるんだ」

「そうかい」

肉屋は僕に初めて気がついたような様子で、ふいにじっと僕の顔を注視した。居心地が悪くなるほどあからさまで、そして彼はやさしい、いたわるような、ちよつと寂しくなる目でこちらを見つめていたのだ。すごく長い時間のようだったし、たった一瞬だった気もした。やがて肉屋は快活に笑った。市場の喧噪が戻ってくる。

「不摂生への戒めも兼ねて、これも持って行きな」

切り出され、彼に手渡されたのは、僕の上腕部ほどの巨大なハムだった。

受け取った彼の腕には逞しい筋が浮き、僕はそれをひどく羨ましく見つめていた。よく日に焼けた身体は真夏の太陽に似つかわしく

健やかで、力強く、僕はそんな彼を眩しく見上げていたのだ。彼はもう片方の手で僕の肩を叩き、肉屋の前から促す。

「じゃあ、どうもありがとう」

「よく食いな、二人とも」

人混みに慣れず頭が痛い。鼓膜の奥から響くような人々の喧噪と、密集した熱気と湿気に、頭の芯がぼんやり霞んだ。肉屋の声はそれなく、それでも僕はもう一度露天を振り仰いだ。あのやさしい、ちよつと寂しくなるような視線がまぶしくて、ふと目がくらむような気がした。

その後、彼はめまぐるしい勢いで市場を回り、卵や野菜や、齒磨きなんかを調達して回った。財布が擦り切れてぼろぼろだったので、革製品の店の売り子にからかわれ、その場で財布まで新調していた。黒くて薄い皮の、良い形の財布で、僕が持つてもこうはならないだろうというほど、彼の大きな手にすっぽりと収まっていた。

一月はゆうに暮らせそうな食料を買い込む彼は、やはり一月経つまで再びここに帰ってくる気持ちはなさそうだった。いつもの二倍で、と彼が言う以外は、市場の人にとってもそれは当たり前前の光景のようで、そんな彼に僕はただただついてまわった。

いつもこの調子で外出が乏しいなら、彼は普段、たった一人である家にこもっているということだ。写真や、ジャムの瓶や、美味しそうな匂いを立てるスープや、愛犬の墓だけを相手に、たった一人で暮らしている。

ふと、炭坑の街の写真館の婆さんの言葉を思い出す。彼は連れだそうとしても、頑なにあの家から出ようとしないと言ってはいなかったか。大切な人を失ってから、意固地なほどにあの家にこだわりの、毎日を過ごしてゆくだなんて。

「昼飯食べよう、ここのパスタ美味しいんだ」

「あ、はい」

行きつけの店だろうか、市場の様子を一望できるオープンカフェ

に向かつて彼は歩きだす。時々ここに来て、彼は一人でパスタを食べているのだろうか。こんなに大勢の人がいる中ならきつと、自分の「ひとり」は身に染みるだろう。彼は平気なんだろうか。

「こんなにも、こんなにもひとりはさびしいのに。」

「どうした」

先を歩いていた彼はこちらを振り向き、当たり前のように人混みをかき分けてこちらまで走って来る。僕はそこで我に返り、曖昧に首を振って見せた。

オープンカフェのパスタはお洒落で、美しい色が目を惹いた。彼がオリーブとアンチヨビのパスタ、とウェイターに向かつて言うので、僕もとりあえず頷いた。

運ばれてきたパスタは味も香りも派手だったけれど、彼の料理の方が、なんとというか味に丸みがあつて親しみやすかつた。素朴だが、素人くさいと言つのではない、それはきつと、個人の好みの領域なのだろうけれど。

彼は声を掛けてくるウエイトレスに愛想よく笑い、そして美味しくよく食べた。食べ終わるとコーヒーを一杯頼み、街行く人々にちらちらとカメラのレンズを向けた。向けただけで撮らないこともあつた。小さな子どもが彼に気づいて、駆けてきては撮つてとせがむこともあつた。彼ははにかんだように笑つてシャッターを押し、子どもははしゃいで転げ回つた。

「オリーブ、好きか」

「好きです」

突然彼が口を開き、僕は反射的に答えていた。あちち、と眩きながら彼はコーヒーをすすり、何か考えるようにカップの水面を覗き込む。

「じゃあまた、家でも使おう。アンチヨビは嫌いか」

「細かくて食べにくいけど、味は好きです」

「じゃあ大きく切つて、また使おう」

二人のあいだは静かだつた。市場の喧噪と、オープンカフェの御

機嫌なお喋りに飲まれるように、僕と彼はただせつせつと、コーヒーをすすっては町並みを見つめていた。心は静かに凧いでいた。誰かと顔を突き合わせ、コーヒーを片手に街を見つめる時間が、こんなにも穏やかだなんて知らなかった。

彼はやがて過去の思い出を振りかえるように、ぽつりと尋ねた。

「ピクルス、好きか」

「ええ、好きです」

その時の彼は、ちよつと返事のできないような顔で、こちらを見返していた。気のせいかもしれないけれど、驚いたような、哀しいような、自分が許せなくて仕方がないような、そんな気持ちが顔を横切ったような気がした。僕は言葉を選び、最後のコーヒーをすする。

「酸っぱくて、好きです。ちよつと、他には無い味だけど」

「俺も嫌いじゃない」

彼はコーヒーの残りを飲み干し、僕もカップをことんと置いた。さっきの会話は初めから無かったような様子だった。どちらからともなく立ち上がる。

「あら写真屋さん、久しぶり」

彼は聞こえなかったようで、黙々と立ち上がり去ろうとする。

僕がつついて振り向かせると、彼は驚いたように振り向いて、やがて愛想良く笑った。背後のカフェのカウンターで、若い女性が手を振っていたのだ。彼女はぱたぱたとこちらに駆けてくる。小花柄のワンピースが、ひらりと風にひるがえる。

「来週、写真館の方忙しいかな」

「いえ、いつ来てもらっても大丈夫ですよ」

どうかしたんですか、軽い調子で尋ねた彼に向かって、カフェのウエイトレスが女性をつつく。はにかんでうつむく彼女の代わりに、ふくよかなウエイトレスが、大袈裟にまばたきして宣言した。

「郵便局の男の子と結婚するのよ。その記念で、ねっ」

くすくすたそうに笑う彼女の顔を見て、彼はふと、やさしく目を

細めて呟いた。

「良いなあ、家族ができるんだ」

ぴんとこない言葉だったが、幸せそうな彼女の顔を見て、ああ、良いな、良いことなんだな、というのはうっすら理解した。遠慮とか、気兼ねとかをしなくて良くて、いつも傍にいてそれが気詰まりでない。毎日一緒に食事して、他愛ないことを話して笑って、…ああ、そういうのを家族と言うなら、それが今からできると言うなら、それはきつと幸せなのだろう。全然大したことのないあいつ、時々うちのめされるほど掻き回してゆく寂しさとか言う奴、あいつのついている隙のない幸せ。そんなものがもし作れるのなら。

「その子は、見ない顔ね」

ウエイトレスにふと指をさされ、僕は所在なく目を逸らしそうになる。彼は不意に僕の頭を引き寄せ、くしゃくしゃと親しげに掻き回した。

「下宿してる子です。夏のあいだはずっとここに居るから、よろしく」

僕は目眩のような戸惑いを覚え、やがて目を伏せた。彼を押しやうって良いものか迷い、結局はされるままにしていた。肉屋の親切とも、結婚の決まった彼女とも違う、彼の一線を越えた近すぎる何かは、僕の一部を確実に圧迫するのだ。圧力を嫌い、距離を取ろうと離れようとしても、今度は失うのが怖かった。こんなに親しい人は初めてだった。それが良いのか悪いのかを別にして、それを判断できないほど、僕はこれまでずっとひとりだった。

彼を見上げると、透明な双眸と目があった。いつもの通り彼の目は焦点を合わせておらず、僕の向こうの何かに目をこらしているようだった。彼は不意に、泣き笑いのような表情を浮かべた。自嘲のような、ふがいなさのような、それはジープで写真を見た時の顔にそっくりだった。

「下宿祝いにこれあげる」

彼女が鞆から取り出したのは、大きなオレンジ二つだった。ぽこ

んと膨れた萼の部分が、こちらをじつと見返していた。オレンジの彼女は、彼の鞆にぶら下がるバナナと林檎の袋を見て笑う。

「私の家、果物屋なの。その様子だともう行ってくれたみたいだね」

「ありがとう、助かるよ」

「来週はよろしくね、写真屋さん」

彼女はオーブンカフェの奥へと消えてゆく。待ち合わせがあるのだと、ウエイトレスに告げるのが聞こえてきていた。

僕らはどちらからともなくまた肩を並べ、森に向かって歩き出した。

八月三日

朝：シナモントースト、野菜たっぷりスクランブルエッグ

昼：オリーブとアンチョビのパスタ

夜：鶏肉のシチュー その他

二人で市場に肉を買いにゆく

失くしたと思っていた写真をジープで発見 アルバムに収める

果物屋の姉さんが結婚 写真はうちで撮ると言う

鶏肉と卵を買い込み、ピクルスもいくらか買った あの子はピクル

ス好きらしい

砂糖、小麦粉、魚介に調味料、目に付くものからジープに放り込む

魚介はもつと欲しかったけど、ジープに入りきらなかった

やはり二人分の食料はかさばる

夜はシチューを二杯おかわり 賑やかに飯を食う 俺だけ酒を飲む

煙草買ってくるの忘れた

リビングに、昼下がりの重たい光が溜まっている。日が傾いて、夕焼けの色がかすかに日差しに混じり始める時間帯だ。微妙に歪んだりビング、…たとえば椅子が木製ではなく、写真館にうち捨てら

れたようなパイプ椅子になっていたり、東側がまるまる朽ちていたりするリビングに、彼は足を踏み入れた。見慣れたソファにはだらしなく弟が眠りこけている。タオルケットを掛けてやったのは自分だ。

「もう起きろよ、なあ」

脇腹をくすぐってやると、芋虫のようにごそごそ動く。嫌がる弟にさらにゆさぶりをかけると、むうと押し込めたような不満の音が聞こえてきた。やがてそれも笑い声にふるえてゆれる。そのまま首のあたりをくすぐってみると、きやあつと声を上げてもんどりうった。笑いすぎて声が引きつっている。

「ほら、こんなところで寝たら風邪ひくぞ」

ソファから半分転げ落ちた格好で、弟は腕にかじりついてきた。やわらかな髪が上腕部に触れてくすぐりたい。思いの外強い力で腕を引かれ、バランスを崩す。

「兄ちゃんも時々ここで居眠りしてるくせに」

「なんだと」

くすぐられてこっちまで腹筋が引きつってくる。そうやって馬鹿みたいに一日中くすぐりあっていた。くだらないけどたいせつだった、何でもないけどかけがえがなくて、一瞬一瞬がきらめいていた。

タオルケットもTシャツもぐしゃぐしゃにして転げ回る弟を見てふいに、これがかつて失われた光景だということを思い出す。哀しく腕を落とし、弟の後頭部を、背中を見つめる。健康的に張っているが、まだ未熟な背中だ。華奢ですぐに崩れてしまいそうで、それでもこれからどんどん伸びてゆく背だ。

抱きしめたい気持ちをふと抑える。ここで手を伸ばしてしまうとまた、この夢は覚めてしまうだろう。

「兄ちゃん」

タオルケットにくるまっていた弟が起き上がる。

振り向いた顔はあどけない弟のそれではなかった。一片の陰りも

ない明るい表情でも、胡桃のようによく動く瞳でもない。静かにス
ープの表面を見つめる、下宿生のあの子だった。大人びていて神経
質で、臆病だけれど優しい顔をしていた。

「なあ、兄ちゃん」

あの子の声の深さと、弟のあどけない物言いが混ざる。切れ長の
双眸が透明な光をたたえてこちらを見返していた。くしゃくしゃの、
やわらかな栗毛が光をはらんで揺れる。

タオルケットをはねとばして、彼はようやく目を覚ました。

写真家さんなんか嫌い

それからと言うもの、彼が家を出ることはなかった。僕は夏期休暇中の課題を終え、部屋にこもるよりもリビングで過ごすことが多くなっていた。彼は森に撮影に出かける以外はほとんど室内にいて、リビングでコーヒーを飲んだり、暗室にこもって写真を現像したりして過ごした。

表札も看板もないこの家は、黒を基調とした石造りで、綺麗なステンドグラスは時々彼が脚立に乗って掃除をしている。煙突は実用性がありそうだが、夏場の暖炉は固く閉ざされ、中を見ることは叶わない。

リビングには小さなソファがあつて、それは、僕が横になれば膝から下が飛び出してしまふような大きさだった。僕はそこに膝を抱えて座り、本を読んでいることが多くなっていた。彼はその間、森を見回ったり食事の仕込みをしたりして毎日を過ごしていた。

誰かが傍に居ることが、いつしか自然になっていた。

「すみません、お届け物です」

ある日の朝、ふいに玄関の呼び鈴が鳴った。彼は昼飯に向けフライパンでガーリックを炒めており、僕がふらりと玄関に出る。

「はい」

「ああ、すみません。出直します」

玄関先に立つていたのは、自転車を携えた若い男だった。写真家さんと同い年くらいだろうか、郵便局の人が被るような帽子と、爽やかな青いシャツが印象的だった。

「いえ、もう少しで写真家さんは来られます。今ちよつと、手が離せないだけで」

「あなたは」

「久しぶりだな」

足下が影で覆われ、独特に掠れた声が降ってくる。青いシャツの

彼は写真家さんを見上げ、ふいに不機嫌に顔を歪めた。

「郵便局から届け物だ、写真屋」

「わざわざどうも」

分厚い封書を受け取って、写真家さんは神経質な手つきで内容を確認する。

「市場に来たなら郵便局に顔を出せ。いつもお前宛の色々なものが所長の机の上に貯まつてるんだ。お前が持って帰るのが筋だろう」

「配達業務も立派なおつとめだ、手紙屋」

「郵便員だ、おあいにくさま」

継ぎ目無く交わされる会話はごく親しい者のそれで、僕はそれを何となくおもはゆく聞いていた。幼い頃から憧れていなかったと言えば嘘になる、友達と交わす軽口と雑談。こんなに傍で繰り広げられるのは初めてで、聞いているだけでこそばゆく、少し華やいだ気持ちになる。

キッチンで湯の沸いた音がした。写真家さんはあれ、と呟き、見上げた僕と視線があう。

「行って来てくれないか」

「あ、はい」

その時ふと、青年のしつかりとした印象の眉と、きかん気そうなへの字の唇が、きゅっと内側に寄って歪んだ。僕は甲高い音を立てる湯沸かし器を止めに、慌てて玄関に駆けて行った。

写真家は郵便物の中身を確認した後、ようやく顔を上げた。個展をやらなにかという誘いの手紙ばかりだった。若くして世界中の賞を総なめにし、今も当代随一と呼ばれる彼の腕に、惹かれる企業は多くある。彼は大して興味もなさそうに、それを玄関に放り投げて言った。

「どうして俺が市場に居たことを知っている。会わなかったらう」「すれ違った」

「どうして声を掛けなかったんだ。いつもここに上がり込んで、飯食って帰って行くくせに」

郵便局の青年はそれには答えず、首筋を数度掻きむしった。余計なお世話かもしれないがな、とようやく一言口にする。自転車のタイヤがきいと回った。

「俺は、お前に言っておかなきゃならんことがある」

写真家はタイヤのホイールに、じつと視線をやっていた。

「あの子はいいつの代わりにはならない」

「知ってるよ」

「わかっちゃいないだろう」

森の木々が切り取った日差しが、写真家の顔を舐めては過ぎゆく。青年はこめかみに指先を当て、押し込めたようなため息を漏らした。「ぞっとしたよ。頭を抱えて掻き回す姿が、まるであいつにする時みたいだった」

「俺は誰に対しても、ああなのさ」

「下宿生を募ったのもそれだな」

「部屋が余ってただけだよ」

写真家の顔は読み取れない。寂しそうな顔にも見えたり、飄々とただ空を見上げているようにも見えた。

「埋めようだったって埋まらない、あの子はいいつじゃないんだから」
「そうだね」

彼の声は森に染みこむように、静かに沈んで消えてゆく。青年はやがて自転車に乗り込み、黙って広場に背を向けた。

その日は緩慢に過ぎていった。写真家さんは昨日もらったオレンジを煮詰める作業に忙しく、僕はリビングのソファで本をめくって過ごした。夏も終わりに近づいた昼下がりには、生ぬるい風が玄関から吹き抜けていて、僕はいつしかまどろんでいた。

こんなに穏やかな気持ちは初めてだった。

どれくらい時間が経つたらう、僕は浅い眠りの中で、寂しい夢を見ていた。誰もいない部屋に一人取り残された夢だった。

「どうせあいつは寄宿舎に入る、そうすればもう、二度と会うこともないだろう」

聞いたことのあるような、ひどくせわしい物言이었다。それでも僕は何となく、それが夢だと気がついていて、誰かが傍に立っているのもわかっていているようだった。白いソファの手すりの向こう、僕が頭を向ける側に、誰かがぼつんと立っている。

まぶたの上で、何か光つたような気がした。

僕はふと目を開けた。目を覚ましたといっても意識はひどく緩慢で、一瞬、ここがどこなのか思い出せなくなる。午後の白く濁った日差しが、大きな影に遮られていた。透明な、僕の向こうを見透かすような右目を、重たく光るカメラが覆い隠していた。

「写真家さん」

飛び起きる。彼の手のカメラを見て、それからまた、彼の顔をまっすぐ見上げる格好になる。こちらを見返す彼はふいに顔を崩した。泣きそうな顔をしていた。子どもが人混みで親にはぐれた時のような、やっと見つけて声をかけたら別人だった時のような、呆然と寂しさに立ちすくむ顔だった。

「何、を」

「良い顔で寝てたから、つい」

「ついって」

曖昧な思考は次第に形を定める。いきなり寝顔を撮られるなんて思いもしなかった。羞恥と、理不尽な嫌悪と、やり場のない情けなさのような、どうしようもない気持ちばかりが混沌の中に渦巻いている。どうして良いのかわからなくて、ただもう一度、申し訳ない顔の彼を見上げた。

「他の人には見せないから、悪かった」

「いつもそうやって撮ってるんですか」

「違う、そうじゃないんだ」

「そつやつて、勝手に」

何か言わなければ、今すぐ彼に言わなければ、そんな思いばかりが先走つて、唇が震えた。はね除けたタオルケットをふるい落とし、2階の部屋に駆け込んだ。

写真を撮られるのは嫌いだった。肉親でもない他人の寝顔にいきなりカメラを向けるなんて、彼の無神経さが信じられなかったし、それに何より、自分の顔がフィルムに焼き付いて残つただだなんて、想像するだけで胃が捻れるような気がする。

昼間に居眠りをするといつも、哀しい夢の残骸を見る。眠っている時、自分がどんな顔をしているかなぞ知らないが、彼の車にあつた写真の少年のような、幸せそうな顔なぞしているはずもなかった。それをわざわざ残そうとするなんて、とうてい悪趣味としか思えない。

写真の少年のように、安心しきつて幸せな顔で眠れるのなら良かったのだ。寂しい夢なぞ見なければ良い。馴れ馴れしい彼に戸惑いながらも、初めてできた親しい人と、穏やかな日々を過ごせるのなら、それで良かったのに。

それでもその晩は、彼と顔をつきあわせて食べた。部屋から出る気になつた自分が不思議だったが、言葉にならない気持ちは消えずに、ただ胸の奥に重く残っていた。どちらも何も言わなかった。曖昧な霧のような世界からふと醒めたような、きりりと張つた静寂だった。

8月13日

朝：鶏肉のオートミールとカクテルサラダ

昼：ライ麦パンとオニオンスープ

夜：ムール貝のワイン仕立て、野菜のポイル

寝顔は撮る前に声をかけられないからどうしようか困る

あまりに良い顔で寝ていたから、シャッターを切ってしまった
名前を呼ばれてはつとした

それ以来まったく近寄ってこない 誰にも見せないから、と言った
が写真の話を嫌う

あきらかに嫌がられている

飯は静かに食べる おかわりを拒否される スープが余ってしまった

深夜に彼は暗室にこもった。現像する写真を選んで、少しだけ準備をしておこうと思った。昨日の朝一番に撮った、ジャムの瓶とテーブルクロスの写真は、雑誌に載せてもらおうと思っている。市場のオープンカフェから撮った、人々の写真も形にしたい。

いつもぼんやりと、何かを考えていて心ここにあらずと言った体の、あの子がふと見せた感嘆の表情、それからすぐにむすつとした無表情に戻ったけれど、十七歳らしいまだあどけなさの残るぽかんと口の開いた顔、これも現像したかった。誰かに見せると言うのが嫌がるだろうから、アルバムにそつと収めたかった。

そして今日、あの子を怒らせた写真について考える。

ソファに身体を丸めて、居眠りをしているのが珍しかった。顔を歪め、うなされているようにも見えたから、一瞬起こしてやるうか迷った。表情の起伏に乏しいあの子には珍しく、寂しい顔に見えた。思わずタオルケットを取り出してきて、かけてやった。寝息は徐々に穏やかになり、沈み込むように眠っていた。タオルケットの端を握りしめる手がまだ青年になりきれない少年のそれで、それを見てふと、カメラを手に取ったのである。

ファインダー越しのあの子は、穏やかな顔をしていた。

熱にうかされたように、思わずシャッターを切ってしまった自分に、正直言って後悔は無い。飛び起きて、怒った気持ちはよくわかる。あの時はこちらにも傷つけられたような気がしたけれど、それも今は違っている。

彼は北向きの自分の部屋に、ようやく戻ってシーツを広げた。

タオルケットにくるまっても、頭はつめたく冴えていた。身体はだるく、朝になっても起き上がれるのか不安になるくらい重いが、

とうてい眠れそうにない。身体がせわしなく脈打っているのを感じる。痛いくらい、心臓が音を立てて動いているのがわかる。

昨晚の夢と、今日の昼の光景と、それはあまりに似通っていた。目を逸らし、見てはならぬと自ら背を向けたつもり的事实が、そこにはしんと横たわっている。

あの子を弟の代わりにするつもりはないのだ。

それでもいつも、思い出と今この瞬間を重ねている。違うことを認めようとすると、羞恥にも似た焦りが吹き出し頭を抱えずにはいられぬほど、それほどいつも重ねている。

市場で髪をくしゃくしゃにしたとき、思わぬさびしさに胸が詰まった。いつも弟にしていたように、ふと引き寄せられるように髪を掻き回し、そうするといきなり、今、この瞬間がこぼれおちてゆく気がした。すぐ傍にいる人まで消えてしまいそうで怖かった。抱きしめた瞬間に腕から失われ二度と戻ってこない、あの夢は生々しい感触として、今、この瞬間もすぐそばにある。

失う痛みに目をこらすと、何もかも抱きすくめたまま、今度はその手をゆるめるのが怖くなるのだ。ますますきつく力を込めると、抱きしめられた方は息ができない。

弟の代わりなぞ誰にも出来はしないのに、それは彼自身がいちばんわかつているはずなのに、それでも同じように重ねてしまう。記憶の幻影の型に押し込めてしまう。押し込められた相手は思いがけない苦しみに戸惑い、腕に力を込めた相手をいぶかしく思うだろう。こちらの気持ちなぞ伝わらない、それだけは痛いほどわかっている。

東向きの部屋からは寝息が聞こえてこない。向こうもおそらく、暗闇に目をこらしているのだろう。ただただ静かに夜は更ける。さびしい静寂に更けてゆく。

写真家さんはやさしすぎる

次の週に入ると、夏の日差しはさらに眩しくカーテンの隙間から覗いた。彼は相変わらず、森の入り口のすずかけの木や、僕の揃えて脱いだスリッパなどにレンズを向ける日々だった。僕は休暇中の課題を終え、のんびりリビングで過ごすことが多くなった。

「キイチゴ穫ってくるよ」

「森に生えてるんですか」

返す言葉がきこえない。昨日、怒ってしまったせいで、いつものような返事が難しいのに、黙っているのも忍びなかった。彼も少しきこちなく笑った。

「毎年豊作さ」

彼はシャツの袖をまくり、大きなカゴを持って外に出る。僕はそれに背を向けていたけれど、彼が玄関をぱたんと閉める音まで、息を潜めて聞いていた。

ひとりで、この家に過ごすのは初めてだった。

僕は膝を抱え、リビングのソファに座っていた。こうやって過ごしていると、自分が小さな小石になった気持ちになる。外部には一切影響を及ぼさない、そこにあっても無くても変わらない石。そうやって意識を深く深く自分の内側に掘り下げ、気づけば世界には僕しかないような気持ちになってくる。

寝顔を撮られた羞恥はまだ、胸の底に黒く溜まっている。

しかし、許せないとか信じられないとか、冷やかな拒絶の中に漂うのは、諦めにも似た穏やかな何かだった。細い糸のようなそれに僕は目をこらした。

仲直りなぞしたことがなかった。喧嘩するどころか言葉を交わす友達さえいなかった。どうして良いのかわからないのだ、何とか怒りを収め、折り合いのつくところで納得し、それからまた、不器用に折り合って暮らしてゆくことが。

「ごめんください」

ふいに玄関から声がして、僕は少し迷った後、ソファから起き上がってドアを開けた。初めに目に付いたのは、森や市場に似つかわしくない、炭坑の街で商談に回る人が履いているような黒く光る靴だった。僕は視線を上げ、目を見開いた。

「おまえ、どうして」

そこに立っていたのは、僕の伯父その人だった。

僕はその時、自分がどんな顔をしているのか、はつきり自覚していた。泣きたいような、戸惑ったような笑いかけのような、ひどく不安定な顔をしていた。この人の血の繋がらない甥だと、彼に知られてはまずい気がした。そして伯父にとってもそうであるように、伯父もまた、ひどく不安定な顔をした。

「久しぶりじゃないか」

曖昧にたゆたう時間の流れを、打ち破ったのは伯父だった。商売用ではない、少し改まった上等な夏服と、左手薬指に光る華奢な指輪が真新しく、それでも彼は見慣れた商人の伯父だった。こつくりと深い榆の木色の髪と瞳で、僕の夜の湖のような黒髪や瞳にはとうてい似ない風貌であるのも同じだった。聞き慣れた、少しせわしい物言いで、彼はせき立てられるように言った。

「休暇中か。この写真館を手伝っているのか」

ちよつと返事ができぬまま、僕は伯父をただ見返していた。伯父はやがて塗り替えるように、一片の陰りもない顔で笑った。ひさしぶりだ、と離れて暮らした半年を埋めるように、懐かしそうに呟いてこちらを見つめた。

伯父の双眸に自分が映っているのを見て、いたたまれなく目を伏せる。ここに居たくはなかった。どこでも良い、彼の視線の届かぬ場所へ逃げ込んで、膝を抱えてしゃがみたかった。胸が早鐘のように鳴っている。

「いらつしゃい」

空気を壊したのは写真家さんだった。伯父の肩越しに現れた彼を、

助かった思いで振り仰ぐ。彼はきよとんと二人を見比べ、伯父に向かつて首をかしげた。彼の肩には、僕の胸回りほどもありそうな力ゴが担がれていて、それはキイチゴでいっぱいだった。

「写真館に御用でしょうか」

「身分証明のための写真を撮ってもらえませんか。予約無しで申し訳ありませんが」

「かまいませんよ」

彼はキイチゴのカゴを玄関に放り投げ、それからふと、僕にだけ聞こえるように呟いた。

「知り合いか」

「伯父です、僕の」

へえ、と呟いた彼は、またしても泣き笑いのような表情で伯父の横顔を見つめていた。一瞬彼の顔を横切ったそれは、自嘲とも寂しさとも、懐かしさともつかぬ淡さで消えてゆく。ぽつりと煙草を点した伯父の、左手の指輪がきらりと光った。

その時、彼はいきなりくずおれた。

「写真家さん」

風雨にさらされ長い時間をかけて朽ちた大木が倒れるような、それはごくごく自然な崩れ方だった。低い呻き声を上げ、頭を振って彼は目をしばたかせる。落ち着きを取り戻すように、彼の喉が一度大きく上下した。

「先に行つててくれないか」

やんちゃな少年のような切れ長の瞳が、うつすら濡れて空の青を映していた。写真家さんの声のあまりの穏やかさに、僕は一瞬呆気にとられ、そして意味もなく美しいと思った。彼の瞳に映る空の色が、こんなに澄んでいるなんて知らなかった。

「目眩だよ、大したことない。お茶にあう何かを持ってゆくから、写真館に行つておいてくれないか」

「はい」

彼はまるで何も無かったかのように立ち上がり、それからもう一

度だけ目をしばたかせた。眩しい日差しに目を細めるような、目のくらむような瞬きだった。

僕は彼に言われた通り、伯父と共に写真館に向かった。木々の葉擦れの音を聞きながら、二人押し黙って歩いていった。細かい、美しい木漏れ日を顔いっぱい浴びて、彼はようやく呟いた。

「どうしてこんなところに居るんだ」

「休暇中は寄宿舎に居られないから、です」

「何故戻ってこなかった、その、お前の家に」

「伯父さんは再婚したから」

ふつふつと、何かがゆれては消えてゆく。あんなやつ、もう、二度と会うことはないから。縁も関係も切れるから。伯父の言葉が頭を巡る。貼り付けたような伯父の笑みに吐き気がして、胸だけが高鳴ったままだった。伯父はやさしい声で言った。

「気を遣わなくて良いんだよ、お前は。帰って来ても良いんだ、あそこはお前の家なんだから」

「伯父さんはそれを」

当然のことと受け止めていることだったけれど、言おうとすると唇が震えた。改めて口にするのと初めて、曖昧に輪郭を失っていた事実が形作られ、それは思いの外残酷だった。

「それを望んではいなかった」

彼は僕の不在を望んでいたはずだった。それは僕にとっては、幼い頃から思い知らされてきた自明の事実で、自分が酸素を吸って生きていくことと同じくらい、自然で当たり前のことだった。僕の傍には誰もいない、僕を必要とする人なぞ誰一人とて居ない。

薄暗い写真館の中で、窓から零れた光に埃がきらきらしていて、それはこの世のものではないように美しかった。僕はそれを目をこらして見つめていた。伯父は僕の横顔を、熱心にじっと見つめていた。

それともあそこに、僕が実態の掴めなかつた愛情があつたのだろうか。僕があまりに鈍感だつたために、だから伯父の僕への思いやりや、愛に気づかず家を出て来てしまつただけなのだろうか。

伯父の肩越しに、彼が機材を触っているのが見える。何とというかただそれだけで、何となく気持ちの落ち着くのが不思議だつた。わだかまりも仲違いもまだあつて、それでも、僕は二年間共に暮らした伯父よりも写真家さんを好ましく思つていた。そんな自分は残酷だろうか、考えて僕は目を伏せる。

伯父が戸惑いの上に貼り付けた笑みは、心の底からのそれなのかもしれない。僕との意外な再会を純粹に喜び、そんな伯父の好意を僕は踏みにじっているのだとしたら。

「そんなことはないんだよ」

伯父はちらりと写真家さんを見た。親しみではない、何か黒く冷たく、底冷えのするような視線で彼を見つめていた。伯父はかさかさに乾いた唇を舐め、神経質に指を震わせた。それはかつての、酔つて父親の愚痴に潰れる時の伯父の癖だつた。苛立ち、何かにぶつけないには居られない時に、彼はいつも自らの指を触るのだ。

「彼女もお前が帰ることに賛成している。私たちがそれを望んではいないなどと、何を聞いてそう思つたのか知らないが」

「お客さん、準備ができたので、こちらへ」

写真家さんの掠れた声も、聞こえぬ様子で伯父は急いだ。

「金の心配なら、要らない」

ふと、背筋を冷たい手で撫でられたような気がした。

「学生には国から補助が出る、知っているだろう」

浮かぶのは、金銭を失わぬためにやれることは何でもやってきた伯父の姿だつた。今は亡き僕の父親から、巻き上げられ何度も苦澁を舐めてきた彼に、切り詰める生活は染みついていて、育児補助が出るのに彼が甥の世話をするのを嫌がつたのは、生活のきつい時に食費のかさむのを嫌つたからだ。その事情を僕は、嫌と言つほど知つていた。

「戻っておいで」

ああ、そうか。

学生を抱える家庭には補助が出る。しかし、僕は寄宿舎で暮らしているから、学費も生活費もアルバイトで捻出しているから、彼らの懐を痛めることはほとんどない。そして本人も普段は学校に入り浸りで、引き取っても家に居るのは休暇の何日かのみなのである。

補助金は恐らく、彼らの懐にまるまる収まるのだろう。

「ありがたいですけど伯父さん、でも」

心はひどく平らかだった。うつすら笑っていたかもしれない。全てのからくりが見えてしまえば、恐れることなぞ何もなかった。僕は背筋を伸ばし、伯父と向かい合う。

「もっ少し、自分の力でやってみたいのです」

醒めた目で伯父の双眸を見つめると、褪せた落胆が瞳の奥に濃く溜まっているのが見えた。手に取るように、僕は伯父の落胆を見つめていた。生活のための予備収入を手に入れ損ねた落胆だ。僕は今度は意識して、薄く笑った。

「写真ができあがったら、封書にして送ります。伯父さん」

一瞬でも戸惑い、舞い上がった自分があさましくて嫌だった。闇雲に手を伸ばし、自分に対する思いやりの姿をした何者をもつかみ取るうとした自らの姿が他人を見るようにありありと脳裏に浮かんで、それが何より自分を傷つけた。

愛情に飢えてるわけじゃない。断じて違う。これからたった一人で、あの大了たことのない、秋の嵐のようなあれと肩を寄せ合って生きてゆくつもりだ。それを僕は選び取ったのであり、誇り高く生きてゆくのであり、その覚悟はとうにできている。

「伯父さん、どうか奥さんとお幸せに」

伯父はその日、写真家さんに二枚の証明写真を撮ってもらって、この写真館を後にした。伯父を見送った後、体調の悪い写真家さん

は、捻子が切れたように座り込んだ。僕はそんな彼に断つて、冷蔵庫から冷たい飲み物を取り出した。

二人分の飲み物をリビングに置き、僕らはソファに並んで座った。泣けて泣けて、仕方がなかった。

ソファに膝を抱えて座り、こぼれてもこぼれても止まらぬ涙を、僕は持て余して泣いた。どうして自分がこんなに泣くのか、わからないくらいだった。

いつの間にか元気になっていた彼は、僕が飲み干したグラスを手に、ソファから腰を浮かし掛ける。僕はその袖口を思わず掴んだ。

「行かないで」

一人になるのは怖かった。ここで、ひよつとしたら自分は一人ではないのかもしれないと、ちらとでも思い始めていた瞬間だった。故郷で僕は誰の役にも立てなくて、誰にも必要とされていなくて、それは今も同じだった。それは生まれた時から思い知っていたはずだったのに、この期に及んで傷ついている自分が寂しくて仕方なかった。誰かが傍に居てくれないと、ぜんぶばらばらになって崩れてしまいそうだった。

「ああ、すみません写真家さん、でも」

鼻声になって苦しい。格好悪い自分が心底嫌になる。

「もう少しだけ、ここに居て」

それでも、たったひとり生きてゆく覚悟だったのに。

「俺は、キミが居なくなってしまうのかと思った」

考え込むような間があつて、それから彼はぽつんと呟いた。彼は迷ったように伸ばしかけた手を下ろし、それからそつと、僕の頭を引き寄せた。親しい弟にするみたいに、ずっと一緒に暮らして来た人にするみたいに、そのまま僕の髪を掻き回す。親しい体温に息が詰まった。

「良かった、キミはもう少しここに居るんだ。そうだろう」

彼は僕のぐしゃぐしゃの顔を見て、そして笑った。

「寝顔撮ってごめん」

返事できずに彼を見つめ返す。彼はふいに真顔になって言う。
「今度からは、ちゃんと声を掛けて起こしてから撮るよ。寝顔」
明らかに矛盾したことを言って、彼はそれに気がつかないくらい
大まじめだった。もしくはわざと言って励まそうとしてくれている
のかもしれなかった。

彼は僕ではない誰かにするのと同じように、恐らく僕と向き合っ
ている。はつきりとはわからないけれど、息の詰まるぬくもりはそ
れでも、今の僕には必要だった。

リビングには、濃い夕焼けの色がうずくまっている。差し込む光
が金色だった。

八月十四日

朝 ピクルスサンドとルッコラのサラダ

昼 鮭のムニエル バターとレモンを加えるとたいへん美味

夜 海老とオリーブのドリヤ 地中海風

昨日余ったスープは、夜食としてパンにひたして食べた やっぱり
美味

下宿生の伯父が来る 新しい商売を立ち上げるための証明写真を二枚
スナップはいらないとそそくさと帰って行った

金は後払いで納入してくれると言う 料金に驚いていた
やっぱりちよっとうちは高いかもしれない 下宿生も驚いていた
二人で食べる食事は良い 明日もきつと晴れ

書き終えてから写真家は、窓越しにさえざえと青く光る月を見上
げた。隣の部屋からは、穏やかとは言えないまでも、静かな寝息が
聞こえてきている。彼は下宿生を起こさぬように、そっと台所へ向
かった。

ここにこうしてじっとしていると、隣の部屋に誰が居るのかわか
らなくなつて来そうだった。コップにたっぷり水を満たして、一息
で飲み下す。口に入りきらずこぼれた水が、タンクトップから伸び

る彼の首を、腕を濡らした。

手放すのがこんなにも怖くなるなんて、思つてもみなかった。

下宿生が来て一月になる。弟が腕の中から失われてゆく夢は徐々に見なくなり、昼間は随分と心満たされていた。喧嘩していた時でさえ、ちよつとした仕草に弟を見た。そしてそれとは関係無しに、親しい人が傍にいるのは良かった。

リビングの大きな窓からは、広場の向こうに森の入り口が見えている。その入り口に消えて行った弟の背中を、彼は今でも鮮やかに思い出すことができる。男の子から少年に代わりかけていた、生意気な筋の通つた背だった。翼の名残だと言われる肩胛骨が、まだ華奢に浮くような背だった。

あいつが居なくなれば、このぬくもりを忘れてまた、静かに暮らしてゆけるのだろうか。弟が失われてゆく夢と、愛犬の墓と、一人分のコーヒーを相手にする暮らした。一月前まで当たり前だった日々が今は、ひどく空虚で寂しく思える。

あの子が伯父と不仲なのは、話の端々から聞き取っていた。それでもあの子が今日、伯父に連れてゆかれるのではないかと、寒気にも似た思いで見守っていた。

たとえそれがあの子に最善だとして、あの子がそれを選んだとして、それならこちらはどうなる。

それはまるで幼子の我が儘で、それは自分にもよくわかっているつもりだった。それでも息を潜めて成り行きを見守っていたのだ。

一人に戻るのには怖かった。

もう何も、大切なものを失うのは嫌

声変わりもまだ迎えていない、弟の声が蘇る。今、この瞬間、このリビングのすぐ傍で聞こえたような声に、彼は頭を抱えてうずくまった。首もとの濡れたタンクトップがしんと冷えて、彼はそこを握りしめたままにしていた。

弟と彼が全てを失つたあの日、弟はまだ幼く、彼もまだ学校に通

う年齢だった。森の奥深くではなく、広大に広がる麦畑を横切った向こう側の、小さな村に住んでいた。

彼はあの日のことを、今、目の前で行われていることのように、ひどく鮮明に思い出すことができる。弟の顔を舐めるように照らした雷が、家を飲み込んで天まで昇るかに思われた炎が、今もすぐ目の前にある。

あの夜、彼は弟と一緒に、こっそり家を抜け出した。

雷の夜に裏手の湖へ行くと、湖と雷の神様が酒盛りをしている。その現場を見た者は必ず神に酒を勧められ、それを断ると湖の主に引きずり込まれて殺される。飲めばこの世の者ではなくなり、天上界へと連れてゆかれるのだという。

彼と弟は、そんな言い伝えのある村で育った。炭坑の街の近く、鉄工業と溶接業の盛んな工業の街だ。大きな溶接炉と乾いた草原の近くに、二人の生まれ育った家はあった。高名な写真家だった父の故郷で、人のぬくもりと、工業化の煽りを受けながらもなお、美しい自然を残す村だった。父は幼い頃から故郷を愛し、そこを拠点に様々な写真を撮りに出歩いていた。

柳の葉からしたたる一滴の朝露、冬眠から醒めて去年埋めた木の実を探すシマリス、そんなものを父は特に好み、それは息子たちにも受け継がれていた。

酒盛りを見た者に為される残虐な仕打ちは、まあ言えばお話の尾ひれのようなもので、嵐の夜に出歩く子どもを戒めるための無くても良いお説教のようなものだ。そう言ったのは、幼い弟よりは少しばかり世の中が見えていた幼き日の彼で、弟は兄の言葉に大きく頷いた。

「酒盛り、じゃあ大して怖くないんだ」

「うん。殺されるとか絶対嘘だから」

「じゃあ見に行く。兄ちゃんも行くよね」

二階で眠る父と母を起こさぬよう、二人で足音を忍ばせ、乾いた雷の中、真夜中にこっそり家を出た。世界に名を知られた写真家だ

った父の、いつとう良いカメラを携え、彼は弟の手を引いて家を出た。湖と雷の神様の酒盛りの光景を、カメラに収めてやろうと思っていた。

酒盛りというのは本当は自然現象で、稲光と細かい霧雨と、湖の微妙な風土の関係で、立ち上る光の影がそのように見えるのだと、彼はもう学校で既に習っていた。弟は原理が理解できず、ただただ酒盛りを見たがった。彼の父は当代随一の名手と言われた写真家だったが、しかし、その光景を撮ろうと嵐に突っ込んでいっては、結局は手ぶらで帰ってきていた。

父に手ほどきを受け、写真を学んでいた彼は、神秘的な自然現象をカメラに収めようと息巻いていた。それで父を越えられると、本気で思っていた。

弟の手を引いて、溶接炉の脇を横切って歩いていった。雑木林を抜け、湖に着こうと、気持ちはひどく急いでいた。ぬかるみに足を取られ、転んだ。二人で何度も転びながら、最後は惰性のようにただ立ち上がって進んでいた。何のために濡れそぼって歩いているのか、自分たちでもわからなくなるほどだった。

月明かりのない晩だった。分厚く暗い雷雲が、頭上に黒く立ちこめていたのだ。湖まで後少しというところで、ふいに辺りは明るくなった。一瞬、弟の顔がスポットライトが当たったように浮かび上がる。彼は思わず息を飲んだ。

次の瞬間、耳をつんざくような雷鳴が轟き、二人は顔を見合わせた。雷はすぐ近くに落ちたようだった。不吉な予感がよぎって、彼は強く弟の手を引いた。

わけもわからず弟は彼の腕にむしゃぶりつき、彼はあたふたと弟を肩に担ぎ上げ、慌てて家の方へ駆けて行った。

あの時の光景が忘れられない。

溶接炉から、炎が津波のように流れ出ている、さつき来た道は通れなかった。パニックで足をばたつかせる弟を必死でなだめ、遠回りして家を目指した。いつ炎に巻かれるか、不安で仕方がなかった。

振り向けばすぐ後ろに、こちらの背中を舐めるような炎が迫っていた。

雑木林を抜けると、彼は弟を足下に降ろし、膝を折ってくずおれた。

「兄ちゃん」

まわりついてくる弟の髪は焦げ、首筋は煤で真っ黒だった。弟が彼の手に触れ、その感覚の無いことにつつすら寒気を覚えた。弟の顔が蒼白になっていた。

「兄ちゃん、背中」

火傷で水疱状になっている背中を、彼は改めて意識した。彼は弟の手を引き、何とか立ち上がって、また歩き出した。

やっと家のあったところに着いた時、夜は明けかけていた。たった二時間かそこらの間に、家は原型をとどめず崩れている。住み慣れた家を飲み込んだ炎は、そのまままで届くようだった。近所の人々が二人を発見し、彼は慌てて水のある場所へ運ばれることとなった。

その時大人たちに止められたために、二人は家に近づくことも叶わなかった。父さんと母さんは見つからなかった。火は収まるどころかさらに勢いを増し、背中痛みも耐え難いほどになっていた。待てども待てども引かない痛みに、衰えぬ炎に、混乱していたのかもしれない。

その時おもむろにカメラを抱え上げた自分のことを、彼はほとんど覚えていない。

炎に魅入られるように、惹きつけられるように、そこへ歩いてゆけない彼は、ただレンズにそれを収めたのだ。

暗闇に慣れた目に炎の光は眩しく、目をこらしても残像ばかりが焼き付いて、炎の内部を見ることは叶わなかった。弟が腕にすがりついてきた、あの湿ったような体温だけが、妙に生々しくまだ彼の身体に残っている。

忘れたくないと目をこらすほど、熱は曖昧な記憶の彼方へ隠れて

しまつ。それで何度も意識的に思い出そうとする、忘れたくない願うほど。そしてそれが弱まるほど、そして思い出すまでに時間がかかるほど、もう駄目だと目を伏せるのだ。

大切だった日々の終わりまでが、どんどん薄れてゆく。

その後二人は、父親の知り合いだった写真家に写真館を譲つてもらった。

住む家が無くなり、頼れる親戚が居なくなった兄弟は、たった二人で生きてゆくことになった。彼は幸い父から写真の手ほどきを幼い頃から受けており、既に独り立ちできる腕前だった。写真館の主だった父の知り合いと、母方の遠い親戚が、兄弟を一人ずつ預かることも提案したが、兄弟はそれを丁重に辞退した。

もう家族と離れるのは嫌。たった一言で受けうる援助の一切を拒んだ、あの時の選択を悔いたことは一度も無い。

学校を卒業するかしないかの年齢だった彼は、幼い弟を連れて写真館の近くの家に移り住んだ。知り合いの写真家は遠い炭坑の街に引っ越していった。

引っ越しの当日の朝、彼は弟の手を借りて、焼け崩れた自宅に向かった。火事が起きて2日後、彼は何とか火傷を押して立ち上げられるようになった。彼が病院から出ることを許されなかった2日間のうちに、父の知り合いは乏しい兄弟の所有物を掻き集め、できる限りの援助をしてくれていた。

長年暮らしたその家は、見る影もなく崩れ落ちていた。

周囲に崩れて危ないからと止められ、二人は裏口からこっそり忍び込んだ。リビングとキッチンと、父の仕事場はまるまる焦げて崩れて無くなっていたが、勝手口だけがほんの少し朽ちたように残っていた。勝手口の傍の壁や柱は焦げたり煤がついたりしながら倒れており、その下からは燃えた手のようなものが見えていた。左手の薬指に見慣れた指輪が光っていた。

それを見て彼は、膝をついて泣いた。

弟はまだ幼く、自体を飲み込めずにただ、兄の手を握って微動だにしなかった。まだ骨の定まっていない、湿ったような手のぬくもりが、彼を何とか現実に繋ぎとめていた。それがなければ崩れてしまいそうだった。身体の水分がぜんぶ涙になつて崩れ落ちた勝手口に吸い込まれて、そのまま立ち上がれなくなつてしまいそうだった。その日の夕方、兄弟は譲つてもらつた写真館に引越した。火事の写真でもらつた賞のため、兄は写真の仕事に事欠くことはなくなつた。

そうやって兄弟はずっと、この家で暮らしてきた。

彼はその朝、ベッドの上で膝を抱えて朝を迎えた。空気の乾いた夜の明ける朝、それはまるであの日と同じ大気の重さで、彼は瞬きもせず窓の外を見つめていた。見渡す限りの森の向こうから、空が薄紫色に白み始めるのを見つめていた。

手紙屋さんはいい顔をしている

「ごめんください」

ふと、玄関先で声がした。慌てて飛び上がった扉を開けると、郵便局の青年が自転車にまたがってこちらを見上げていた。自転車の後ろには若い女性が乗っている。長い髪が夏の朝のなまぬるい風になびき、一本一本が光に透けてきらきらした。

果物屋の娘だった。

「あら、こんにちは」

彼女は僕にびよこんと頭を下げる。僕も吊られたように頭を下げる。それからゆっくりと顔を上げた。何度か言葉を交わしたきりの人と、他人を介さず向き合っていると、それだけでこの場から逃げ出したくなる。顔を隠して背を向けたいような、突き飛ばして部屋にこもり鍵をかけてしまいたいような。

誰かに顔を覚えられるのは怖かった。明るい日差しの下、健康な人々の目にさらされるには、自分はひどく惨めで暗い。僕は自分の頬に思わず手を当てた。

「写真家さんはご在宅でしょうか、お昼ご飯も持って来たんですけど」

「すみません、今、少し出かけております」

果物屋の娘が、どうしようかな、と自転車のところへ走って戻る。青年はただ、見るとはなしに彼女を見つめていた。何かを決めかねるように視線を泳がせ、顔はずっと伏せられたままだった。

「どうした」

ふと顔を上げると、青年の肩越しに写真家さんが帰ってくるのが見える。彼は目を細め、そう、いつも僕を見透かして、僕の向こうの麦畑やすずかけの木を見ているような時の目で、金髪の青年を見つめていた。果実屋の娘が少しはしゃいで、写真屋さあ、と手を振った。

写真屋さあん、は爽やかな響きで、糸杉の細い葉をこまかくゆらして消えてゆく。

「お前、どうして」

果実屋の娘と金髪の青年を見比べる彼は、心なしか少し狼狽しているようにも見えた。青年も写真家さんを見つめ、何か言おうと口を開きかけ、それからまた、真一文字に口を結んだ。

「今日は写真を撮ってもらうついでに、お昼ご飯も一緒にしようと思っただけだ。郵便局の男の子と婚約するって言うてたでしょう」

青年は何も言わず、やがて僕の足下に視線を落とした。写真家さんはやがて快活に笑い、お昼ご飯何持ってきてくれたの、嬉しいな、と呟いた。

彼は用意しかけていたコーヒを手際よく四人分に増やし、クラッカーとジャムを持ち出した。昨日、彼がぐつぐつ煮ていた綺麗な色のジャムだった。

「これ、先日いただいたオレンジでつくったやつ。美味しそうでしょう」

「わあ、さすが写真家さん」

彼女がほころばせた横顔に、写真家さんは思わず、と言った調子でレンズを向けた。ぱしゃり、と小さな音がして、彼女は気づいてはにかんだように笑った。

「やっぱりそれなのね。わかってても吃驚しちゃうわ」

「後で写真館にお連れするけれど、まあ、こういうのも無いと寂しいから」

「寂しい」

太陽の昇りきらない、澄んだ十時の光がそつと、彼女の横顔の縁をなぞる。彼女は紅茶に口をつけ、ふふつと小さく笑った。

「写真家さんは人のことまで自分のことのように言うのね」

「気に触ったかい」

「ううん、そんなことないけれど」

郵便局の青年は黙ったまま、甘酸っぱいジャムのクラッカーを

かじっている。四人が紅茶を飲み終えるまで、リビングは二人で居るときのように静かだった。娘さんが密やかに何かを言つて笑い、写真家さんがそれを受けて楽しげに答えを返す。僕は自ら蚊帳の外を選んで紅茶の水面を見つめていたし、青年はむっつりと押し黙つたままだつた。

「じゃあ、行こうか」

四人のカップが空になった頃、写真家さんは呟いた。三人は写真館に何度も足を向けているようで、誰からともなく森に向かつて歩き出す。どこにあるのか見当もつかない僕はただ、娘さんのあとをゆっくりついていった。

写真家さんと青年は、どちらからとも早足になり、僕らから少し距離を取るように前を歩いた。彼女はそんな二人を見て、僕と肩を並べのんびり歩く。

「言つてくれたら良かったのに」

以前彼が来た時と同じく、懐かしいような寂しいような、何とも名付け得ぬ表情で、写真家さんは彼と話していた。こちらからは二人の会話が聞こえないが、微妙な表情は見取れる。木漏れ日が二人の顔を照らし、横切つてはまた覆つて光る。

「吃驚した。前来た時もそんなこと、微塵も言っていなかったから」
写真家さんは口ごもり、ふいに沈黙が訪れる。青年の目をちらと見、何か言い掛けては押し黙る、そんな写真家さんの横顔が、ひどく懐かしいもののように感じられた。

「言いにくくて」

意思の強い青年の顔が、今日は少しだけ泣きそうだった。

「言いにくくて、言えなかった」

「それじゃあお前、これまでみたいに、ここで仕事を放り出して一日中喋つてるわけにもいかなくなるな」

隣を歩く彼女からは、幽かに綺麗な匂いがした。果実の匂いに混ざつた、清潔な香水の匂いだ。炭坑の街では、そんなにお洒落をしている人と出歩くことはほとんどなくて、僕は変に緊張していた。

「そんなことはない、また、今までときつと同じように」

「それじゃ、駄目だ」

青年が彼から目を逸らす。逸れた視線は所在なく、結局また、彼の足下の方に戻った。

「大事にしないと、せつかく家族ができたんだから」

何か言おうと、青年が唇を開きかけ、やがて口をつぐんだ。

「手の届く限り、精一杯のことをしろよ。家から出ない友達のことなんてそこそこにしておかないと、何かあったとき後悔するよ」

「写真屋」

「精一杯傍にいるよ、家族と」

写真家さんはやさしい顔をしていた。

「そう言うだろうから、今まで言えなかった」

「今日言っただから一緒だよ」

「できるだけ来るよ」

「あんまり来ると許さないから」

写真家さんはふと笑った。横顔だけ見てもわかる、意識して少しこぼしたような笑みだった。手紙屋、と懐かしい名前を呼ぶように、唇がやがて小さく動く。

「お前今、今までで一番いい顔してるよ」

森の木々が風にゆれて、木漏れ日が彼らの背中に光を切り取る。眩しくて細かい光が、白いシャツの上できらきらしている。彼はおもむろにレンズを向けて、友人の顔を切り取った。

「これまでにない優しい顔だ」

森が開き、煉瓦造りの小さな小屋がそこにはぼつんと立っていた。彼は振り向き、こっちだよ、とこだわりのない様子で手を振った。

八月十五日

朝：ベーコンとオニオンのフレンチトースト 甘いのもつくって二人で食べた

昼：二人が持ってきてくれた牛肉のあれこれ

フルーツを煮込んだソースも持ってきてくれた
レシピを聞いたけど頑として教えてくれない　うちで買えと迫ら
れた

夜：質素め　コンソメスープとあれこれ

手紙屋と果物屋の姉さんが結婚祝いに写真を撮りに来る

下宿生が手伝ってくれる　手際が良いから、いつもの半分くらいの
疲れで済んだ

キイチゴのジャムをつくる　まだたくさん残っているので、ジュー
スを作ったり、料理の隠し味にしたりすることとする　砂糖を減ら
して酸っぱくしたのは成功

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9096s/>

ブラザーハウスの追憶

2011年5月5日20時10分発行